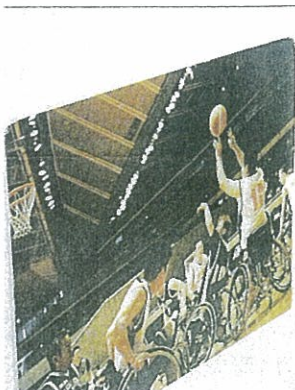


ひと

障害者スポーツをビジネスにする

伊藤 数子 さん(52)



福祉のイメージが強い障害者スポーツをビジネスとして成り立たせられないか。大会の動画配信などで資金を集め、障害者スポーツのPRやイベントを展開する。「障害者をさらしものにするのか」と批判もあるが、「普及事業を拡大させることが大事。そのためにお金は必要」と播るがない。本業は金沢市の企画会社社長。

2003年、大阪での電動車いすサッカー大会に、友人の選手が出場できなくなった。試合を見せたいと、ITの知識を動員し、インターネットで中継した。反響を呼び、主催者からも継続を頼まれ、やりがいと手応えを得た。

NPO法人「STAND」を立ち上げ、約1千社の企業を回ったが、スポンサーになったのは3社。競技の魅力を発信するウェブサイトを作り、障害者スポーツを知ってもらうことから始めた。

事業収入は増え、今では約3千万円。広告や協賛金などで協力する企業は延べ50社になった。それでも、まだ黒字化は厳しい。私費を投入しての運営が続く。

「迫力あるプレーは一般スポーツと変わらない価値がある」。今は拠点を東京に移し、障害者スポーツの盛り上げに情熱を注ぐ。

気分転換は週に1度の空手。汗と一緒に悩みも流し落とす。「20年の東京パラリンピックの会場を観衆でいっぱいになりたい」。道場で心を静め、その作戦を練っている。

文・写真 榊原一生